

令和6年度(2024年度) 小学校不登校に関するプロジェクト研究

児童が安心して成長できるSSRのあり方

－「人とのつながり」「安心してできる環境づくり」「周囲の理解」を軸にした
SSRの充実に向けた取組を通して－

内容の要約

本研究では、児童が安心して成長できるSSR(校内教育支援センター)のあり方について、「人とのつながり」「安心してできる環境づくり」「周囲の理解」の三つの要素を軸に支援を充実させることで、SSRが児童にとって安心して成長できる場となることを目指した。そのために、アセスメントとプランニングを通じた児童理解、SST(ソーシャルスキルトレーニング)や交流の機会の設定、SSRの環境整備、児童の自己決定の支援、教職員と児童への啓発、情報共有などに取り組んだ。これらにより児童が自分の思いを表現できるようになり、SSRが社会的自立を見据え安心して成長できる場となった。

キーワード

SSR(校内教育支援センター) 社会的自立 アセスメントとプランニング
「人とのつながり」 「安心してできる環境づくり」 「周囲の理解」

目 次

I 主題設定の理由	(1)	V 研究の進め方	(5)
II 研究の目標	(2)	1 研究の方法	(5)
III 研究の仮説	(2)	2 研究の経過	(5)
IV 研究についての基本的な考え方	(2)	VI 研究の内容とその成果	(6)
1 SSRの位置付け	(2)	1 研修と実践の往還	(6)
2 SSRの三つの要素に関する支援の 充実	(2)	2 三つの要素に関する支援の実際	(8)
3 SSRの三つの要素に関する支援の 工夫	(3)	3 教職員の変容および児童の見取り	(11)
4 実践における成果の検証	(5)	VII 研究のまとめと今後の課題	(13)
		1 研究のまとめ	(13)
		2 今後の課題	(13)

文 献

社会的自立

を見据えた

児童が安心して成長できるSSRのあり方

SSR

校内教育支援センターのことで、学校には行けるけれど自分のクラスには入れない時や、少し気持ちを落ち着かせてリラックスしたい時に利用できる部屋のことです。



個別学習エリア



協働学習エリア

人とのつながり

連絡帳や記録簿を通した日々のアセスメント
ソーシャルスキルトレーニング
人と交流する機会の設定



「今日のわたしノート」



スペシャルサポートルーム

SSR

学びの空間の工夫

自己決定できる学習の場づくり

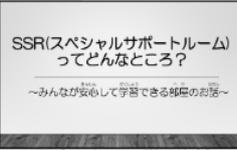
教職員の認識の向上
児童が学ぶ機会の設定
連携、情報共有できる組織づくり

保護者との連携

周囲の理解



教職員のためのSSR通信



児童のための説明資料

安心できる環境づくり



実践

往還

研修

学校を越えた横のつながり (SSRの充実に向けて!)

プロジェクト研究会 一全5回

- 第1回 研究の方向性、内容等の共有
- 第2回 各校の実情の共有、SSRのルールづくりについて
- 第3回 先行事例の共有、2学期に向けて
- 第4回 アセスメントとプランニング、未然防止について
- 第5回 研究の成果と課題の共有

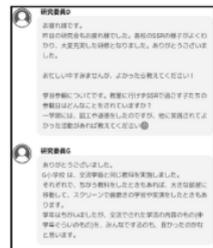


協議の様子



本研究で作成した『「チーム学校」で取り組もう！SSR』は、滋賀県総合教育センターのホームページに掲載しています。ご活用ください。

日々の情報共有 相談・解決



コミュニケーションツールを活用した情報共有

みんなが安心して学べる居場所づくり

滋賀県の方向性

- [1] 子どもの目線に立ち、小さなSOSを見逃さず、「チーム」で支援します。
 - [2] 子どもの状態に応じた学びの機会と居場所を確保し、一人ひとりの思いに寄り添いながら、学び育つことのできる環境を整えます。
 - [3] 学校を「みんなが安心して学べる」場所にするとともに、多様な学びの場・居場所と連携し、社会的な自立の機会を保障します。
- 【しがの学びと居場所の保障プラン ～安心して学び育つための、不登校の状態にある子ども支援～ (滋賀県教育委員会 令和6年3月)より】

SSRの目的

自分のクラスに入りづらい児童生徒が、落ち着いた空間の中で自分に合ったペースで学習・生活できる環境を学校内に設置します。子供たちが心地よい空間の中で学習・生活を行えるよう、快適で温かい環境にします。

【誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策(COCOLOプラン)(文部科学省 令和5年3月)より】

小学校不登校に関するプロジェクト研究

児童が安心して成長できるSSRのあり方

－「人とのつながり」「安心できる環境づくり」「周囲の理解」を軸にした
SSRの充実に向けた取組を通して－

I 主 題 設 定 の 理 由

「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」(文部科学省 令和5年10月)によると、国立、公立、私立の小・中学校の不登校児童生徒数は約299,000人であるⁱ⁾。不登校児童生徒数は5年前と比べ約155,000人増加しており、特に令和2年からは毎年約5万人のペースで増加している。また不登校児童生徒数のうち、学校内外で相談を受けていない児童生徒数ⁱⁱ⁾が約114,000人、うち90日以上欠席している児童生徒数が約59,000人といずれも過去最多となっている。

本県においても、「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査等の結果」(滋賀県教育委員会 令和5年10月)によると、公立学校における不登校者数の推移について、令和2年度(小学校851名、中学校1,358名)から令和3年度(小学校1,066名、中学校1,835名)にかけて急増している状況があり、さらに、令和4年度(小学校1,265名、中学校2,120名)もその傾向が続いていることが示されているⁱⁱⁱ⁾。

この不登校の課題に対しては、これまでも学校現場等において様々な努力がなされ、児童生徒の社会的自立に向けた支援が行われてきたが、不登校児童生徒数は依然として高水準で推移しており、生徒指導上の喫緊の課題となっている。このため、「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」(平成28年12月)が公布され、文部科学省において、「教育機会の確保等に関する施策を総合的に推進するための基本的な指針」(文部科学省 平成29年3月)(以下、基本指針という。)が策定された。この基本指針では、基本的な考え方として、「支援に際しては、登校という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること」¹⁾と示されている。社会的自立については、「社会の一員として責任ある行動をとり、人との関わりの中で合意形成すること」^{iv)}と説明されており、不登校支援の重点として、社会的自立を見据えた取組を行ううえで、「人とのつながり」がその根幹となることがうかがえる。

小・中学生の不登校児童生徒数が急増していることに関わって、令和4年度には学びにアクセスできない子どもたちをゼロにすることを目指し、誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策「COCOLOプラン」(文部科学省 令和5年3月)が策定された。その中で、不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思った時に学べる環境を整える取組のひとつとして、校内教育支援センター(スペシャルサポートルーム等)(以下、SSRという。)の設置が掲げられている。加えて「自分のクラスに入りづらい児童生徒が、落ち着いた空間の中で自分に合ったペースで学習・生活できる環境を学校内に設置します」²⁾とあることから、「安心できる環境づくり」が重要であると考えられる。

また、「生徒指導提要」(文部科学省 令和4年12月)では、「児童生徒が発するSOSを受けとめるためには、教職員が、児童生徒の状況を多面的に把握するための研修等を行い、教職員の意識改革を目指す

¹⁾ 令和5年度の同調査において、国立、公立、私立の小・中学校の不登校児童生徒数は約346,000人であった。

ⁱⁱ⁾ SC(スクールカウンセラー)、SSW(スクールソーシャルワーカー)、養護教諭、教育支援センター、民間団体等での、相談・指導を受けていない人数。

ⁱⁱⁱ⁾ 令和5年度の同調査において、公立学校における不登校児童生徒数は小学校1,562人、中学校2,429人であり過去最多であった。また、学校内外の機関等で相談・指導を受けていない児童生徒数は小学校493人、中学校928人であった。

^{iv)} 「高校生のライフプランニング」(文部科学省 平成30年11月)による。

ことが求められます」³⁾とあり、「周囲の理解」について示されている。そして、本県においては、「し
がの学びと居場所の保障プラン～安心して学び育つための、不登校の状態にある子ども支援～」(滋賀県
令和6年3月)を作成し、支援にあたり重視する視点の一つを、「学校を『みんなが安心して学べる』場
所にするとともに、多様な学びの場・居場所と連携し、社会的な自立の機会を保障します。」とし、対
応する支援策のひとつとして校内の教育支援体制の強化を挙げ、SSRの設置促進等を示している。また、
「滋賀の子ども達の社会的自立を支える 学校教員向け不登校の理解と対応リーフレット」(滋賀県教
育委員会 令和6年4月)(以下、リーフレットという。)では、教職員が子どもの話を聴き、関係をつく
ることなど、「人とのつながり」の重要性について述べている。

これらの背景を踏まえ、本研究では「人とのつながり」「安心できる環境づくり」「周囲の理解」の
三つの要素に関する支援を充実させることで、SSRが児童にとって安心して成長できる場となると考え、
本主題を設定した。

Ⅱ 研 究 の 目 標

児童の社会的自立を見据え、「人とのつながり」「安心できる環境づくり」「周囲の理解」の三つの
要素を軸にしたSSRの充実に向けた取組を通して、児童が安心して成長できるSSRのあり方を示す。

Ⅲ 研 究 の 仮 説

児童のアセスメントとプランニングを基に、児童の社会的自立を見据えたSSRの取組を行う。「人との
つながり」に関する取組では、コミュニケーション能力の育成や他者と交流する機会を設定する。「安
心できる環境づくり」に関する取組では、落ち着いて過ごすことができる部屋の整備や児童が自己決定
できるように支援を行う。「周囲の理解」に関する取組では、教職員や児童、SSRを利用する児童の保護
者に対して、SSRについての理解を深める機会を設定したり、支援のための校内体制を整えたりする。こ
れら三つの要素に関する支援を充実させることで、児童が自分の思いを表すことができ、SSRが安心して
成長できる場となるだろう。

Ⅳ 研究についての基本的な考え方

1 SSRの位置付け

学校は児童にとって学習の場というだけではなく、最も身近な相談機関としての役割も担ってい
る。学校にSSRを設置することは、児童にとって相談のしやすさや、学校から離れずに過ごせる安心
感、他の児童と関わることへの期待感につながると考える。本研究では、「人とのつながり」「安心
できる環境づくり」「周囲の理解」の三つの要素に関する支援を充実することにより、SSRが児童に
とって安心して学校生活を送ることができる場としてだけでなく、人と関わることや様々な学びを通
して成長できる居場所の一つになると考える。そして、SSRにおいて自分自身を見つめ直したり、相談
する力を高めたり、自らの強みや自己有用性に気付いたり、それらを生活の中で生かす力を養ったり
することで、社会的自立につながる場となると考える。

2 SSRの三つの要素に関する支援の充実

SSRにおける支援の充実を図るためには、児童の現状把握が必要である。リーフレットでは、アセス
メントとプランニングで個に応じた支援を構築することの重要性が示されている。そこで、各実践校

において、アセスメントのためのシート¹⁾等(図1)を活用し、SC(スクールカウンセラー)やSSW(スクールソーシャルワーカー)をはじめとした専門職(以下、専門職という。)と連携して、児童の現状把握を行う。SSRを利用する児童の現状や変容、保護者の思いについては、面談やケース会議、指導者が児童と共に活動する中での観察等で把握し、支援につなげる。

また、本研究ではアセスメントとプランニングを踏まえ、「人とのつながり」「安心できる環境づくり」「周囲の理解」の三つの要素を軸にSSRの充実を目指す。

一つ目の「人とのつながり」に関する支援として、窓口となる指導者がアセスメントのためのシート等を基に、不登校児童への理解を深めコミュニケーションを図ることで、児童が安心して人と関わるための土台づくりを行う。同時に、他者とのつながりが生まれるような場や交流の機会を設定する。

二つ目の「安心できる環境づくり」に関しては、様々な理由で学校や教室に苦手意識のある児童もいるため、快適で温かみがある、落ち着いて過ごせる雰囲気のある部屋になるように整備する。その中で、個に応じた学習、交流を伴う協働学習の両立が可能なレイアウトにしたり、各学校の状況に応じて、可能な限り人目を気にせず安心して登校できるように、入室しやすい環境を整えたりする。加えて、児童が心理的に安心できるように、指導者が主導するのではなく、児童自身が学校での過ごし方を自己決定できるように支援を行う。

三つ目の「周囲の理解」に関しては、SSRへの認識向上のために、研究委員ⁱⁱ⁾を中心に教職員対象の研修や児童がSSRについて学ぶ機会を設定する。

ベースシート (小学校版)

作成者 20 年 月 日 作成

年 組 氏名 性別 出身保育園 出身幼稚園

過去の欠席状況 1年 B/ B 2年 B/ B 3年 B/ B 4年 B/ B 5年 B/ B

欠席 4月 5月 6月 7月 8・9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月 合計

遅刻 欠席理由 早退 欠席理由 欠席理由

※SRR・・・スペシャルサポートルーム(校内教育支援センター) ※欠席数の分母は授業日数を記入する。 ※欠席理由の分類は欠席理由を記入する。 ※欠席理由・・・校外教育支援センター ※欠席理由・・・校外教育支援センター

現在の状況・状態について ※家庭や学校での様子、関わりの中での違和感、気づいたことなどを含む

学年・組 担任名 学年・組 担任名 学年・組 担任名 関わりやすい先生

1年 組 2年 組 3年 組 4年 組 5年 組

生育歴 (どのように育てられてきたか)

健康 慢性疾患 聞く・話す

発育・発達 (発達社会) 不注意・多動性 対人関係

性格・傾向 (こだわり) こだわり

興味・関心 読書時間 ()

家での生活 過ごし方等

その他

人間関係マップ (エコマップ) (別紙)

滋賀県教育委員会 (056-4 9827)

ケース会議：個別支援計画シート (小学校版)

シート作成者

年 組 氏名 性別

過去の欠席状況 1年 B/ B 2年 B/ B 3年 B/ B 4年 B/ B 5年 B/ B

欠席 4月 5月 6月 7月 8・9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月 合計

遅刻 欠席理由 早退 欠席理由 欠席理由

※SRR・・・スペシャルサポートルーム(校内教育支援センター) ※欠席数の分母は授業日数を記入する。 ※欠席理由の分類は欠席理由を記入する。 ※欠席理由・・・校外教育支援センター ※欠席理由・・・校外教育支援センター

開催日時 20 年 月 日 () 出席者

開催目的

初期目標

中期目標

P(計画)

いつ・誰が・どこで・どんなことを(フォローアップ体制を視察に付けて)

次回ケース会議開催予定日 月 日 ()

開催日時 20 年 月 日 ()

初期目標

中期目標

P(計画)

いつ・誰が・どこで・どんなことを(フォローアップ体制を視察に付けて)

次回ケース会議開催予定日 月 日 ()

↓

滋賀県教育委員会 (056-4 9827)

図1 アセスメントのためのシート(滋賀県教育委員会ホームページより) ベースシート・個別支援計画シート

3 SSRの三つの要素に関する支援の工夫

(1) 「人とのつながり」に関わる取組の手立て

ア 連絡帳や記録簿を通した日々のアセスメントの充実

日々の児童の体調や気持ち等のコンディションを把握することは重要である。そこで、各校で活用している連絡帳や記録簿、本研究で作成した「今日のわたしノート」(図2)等を活用する。その日のSSR利用の開始時に児童自身が記入したり、指導者が代筆したりする。児童にとっては自分

ⁱ⁾ 滋賀県教育委員会では「ベースシート・個別支援計画シート」として示されている。

ⁱⁱ⁾ 滋賀県教育委員会が「令和6年度生きる力を育むモデル校『スペシャルサポートルーム(SSR)』推進事業」にて加配した教員に対し、滋賀県総合教育センターより本研究の研究協力の依頼を行った者。

の体調や気持ちの状態を記録することで、自身の現状を客観的に把握することができ、困りごとや伝えたいことを相談しやすくする効果が見込める。また、1日の終わりには振り返りを行うことで、児童はSSRで過ごせたことが自信となり、次回の活動への意欲につなげることができる。指導者にとっては、連絡帳や記録簿を通して児童の状態を知りアセスメントをすることで、個々の児童にとってよりよい手立てを考え指導することができる。さらに、これらの記録をきっかけに、指導者が児童と会話をすることによって、児童が他者と関わる機会となり、相談したり、SOSを出して伝えたりする力を育てていくことにもつながると考えられる。

図2 「今日のわたしノート」

イ コミュニケーション能力を育むソーシャルスキルトレーニング

個々の児童の現状に応じた内容のソーシャルスキルトレーニング(以下、SSTという。)を取り入れる。例えば、気持ちを言葉で表すことが苦手な児童に対しては、嬉しい時の言葉、悲しい時の言葉などを分類し、具体的な使用場面や使い方について考えるような取組を設定する。児童の中には人と関わりたい気持ちはあっても、関わり方が分からない場合もある。はじめに自分自身を見つめ直したり、感情表現の仕方について学んだりすることが、コミュニケーション能力を育むことにつながると考えられる。

ウ 人と交流する機会の設定

人と交流をもつことは、孤独感や日常のストレスの軽減、安心感や自己存在感の感受、新たな挑戦への意欲の向上となり、児童の心の成長を促すことが期待される。例えばカードゲーム等のレクリエーション活動や協働学習、他者とのつながりが生まれるような場や交流の機会を設定することにより、安心して指導者や友達に自分の思いを伝えられるようになることが考えられる。

(2) 「安心できる環境づくり」に関わる取組の手立て

ア 学びの空間の工夫

児童が安心して自分のペースで学ぶことのできる空間づくりを進める。個別学習エリアとともに、他者とコミュニケーションを取りながら協働学習を進められるようなエリアもつくり、児童の状況に応じて利用できるようにする。

イ 児童が自己決定できる学習の場づくり

児童が安心して学びに向かうことができるよう、その日に取り組む内容について、指導者と相談のうえで学習内容や活動を選択し自己決定できるようにする。

(3) 「周囲の理解」に関わる取組の手立て

ア 教職員のSSRについての認識の向上

教職員質問紙調査を通して教職員のSSRについての認識を把握し、現状を踏まえて教職員研修等を実施する。また、教職員向けのSSR通信を発行し配付する。それにより、教職員間でSSRの目的や取組、児童への支援等について共通理解を図り、認識の向上につなげる。

イ 児童がSSRについて学ぶ機会の設定

児童にとってSSRが「安心して学べる場所」という理解を深めていく。そのために、必要に応じてスライド等を活用し、学級で学ぶ機会を設定する。そうすることで、児童がSSRについて理解し、

SSRを必要としている児童が快適にその場を利用できるようにする。

ウ 保護者との連携

行き渋りや欠席が増えSSRの利用が望ましいと思われる児童やその保護者には、教職員による定例会やケース会議を経たうえで、懇談を実施する。SSRについて丁寧に説明を行い、児童と保護者の両者から同意を得たうえでSSRを利用する。児童の様子等については、送迎時に話をしたり、学期末に懇談を実施し学期の振り返りや次学期の目標を話し合ったりするなど、保護者との連携を図る。

エ 教職員が連携、情報共有できる組織づくり

SSRを利用している児童の現状を共有し、適切に支援するため、校内で教職員が連携、情報共有ができる組織づくりや、専門職、市町の教育支援センター等の関係機関(以下、関係機関という。)との連携を進め、「チーム学校」としてSSRに関わる仕組みを構築する。

4 実践における成果の検証

児童のSSRでの成長や変容、教職員のSSRに関する認識の変容について見取り、分析する。児童の変容に関わって、児童のSSRでの日常の様子や児童が記録した「今日のわたしノート」等から変容を見取る。教職員の意識の変容については、研究の始期と終期における教職員質問紙調査の内容を分析する。これらを踏まえ、SSRのあり方について、成果と課題の検証をする。

V 研究の進め方

1 研究の方法

- (1) 実践校の管理職や研究委員等と、実践校における児童の実態や課題、ニーズについて共有し、本研究の重点である「人とのつながり」「安心できる環境づくり」「周囲の理解」の三つの要素に関する支援のあり方について協議する。
- (2) 研究委員はプロジェクト研究会での研修と自校での実践の往還を進め、児童の実態を把握し、取組を通しての児童の変容について見取る。
- (3) ICTを用いたコミュニケーションツールを活用し、研究委員同士の情報共有を日常的に図る。
- (4) トータルアドバイザー、専門委員の指導助言を受け、SSRのあり方について検討する。
- (5) SSRに対する理解のための資料を作成し、実践校の児童および教職員への周知や理解を図る。
- (6) 質問紙調査の結果から教職員のSSRに関する認識の変容を分析する。
- (7) 児童の様子や記述等を基にSSRを利用する児童の変容について検証する。
- (8) 本研究の取組をまとめた小学校向けのSSRハンドブックを作成する。

2 研究の経過

4月	研究構想、研究委員の委嘱 研究推進計画の立案	9月～10月	各実践校のSSRに研究員が訪問 第4回プロジェクト研究会(オンライン 実践交流)
5月	第1回プロジェクト研究会(研究の目標と 方法の共有、今後の計画など) 児童・教職員の実態把握	10月～11月	児童の実態把握、教職員質問紙調査(終 期)の実施と分析
6月	各実践校のSSRに研究員が訪問 第2回プロジェクト研究会(オンライン実 践交流)	11月	第5回プロジェクト研究会(成果と課題 についてのまとめ)
7月	広島県へのSSR視察および情報交流会 教職員質問紙調査(始期)の実施と集計	11月～12月	研究論文原稿執筆
8月	第3回プロジェクト研究会(1学期の実践 交流、検証、2学期以降の取組計画の修正)	1月	研究発表準備
		2月	研究発表大会
		3月	研究のまとめ

VI 研究の内容とその成果

1 研修と実践の往還

(1) プロジェクト研究会と実践校での取組の往還

本研究は、滋賀県教育委員会における「令和6年度生きる力を育むモデル校『スペシャルサポートルーム(SSR)』推進事業」と連携し、令和6年度に実施1年次となるモデル校のうち県内公立小学校7校の協力を得て進めた。研究委員は全5回のプロジェクト研究会での研修と自校での実践の往還を通して、「人とのつながり」「安心できる環境づくり」「周囲の理解」の三つの要素に関する支援を行い、児童の実態把握、取組を通しての変容について見取りを行った。その中で明らかとなった成果と課題をプロジェクト研究会で共有し、協議することで、安心して成長できるSSRのあり方について検討を行った。計画・実施したプロジェクト研究会の詳細を図3に示す。なお、第1回プロジェクト研究会については、「令和6年度生きる力を育むモデル校『スペシャルサポートルーム(SSR)』推進事業連絡協議会」と兼ねて実施した。また、実践校が県内各所にあることや研究委員が児童と関わるための時間を確保するため、第2、4、5回プロジェクト研究会についてはオンライン会議システムであるZoomを活用し、関係各所をつないで実施した。第3回プロジェクト研究会については、実践校が夏季休業中のため、総合教育センターにてプロジェクト研究会を実施した。

	学び・気付き	プロジェクト研究会	実践校での取組
4月 ～ 7月	<p>アセスメントとプランニングが重要。</p> <p>SSRの理念を踏まえた形作りが大切。教職員同士が連携し、組織で対応することが必要。</p>	<p>第1回研究会(5月10日) 連絡協議会では、SSRの運営に係る説明、不登校児童への理解と対応について、専門委員からの講義が行われた。その後研究委員の紹介、本研究の概要説明を行い、研究の目標や方法について共通理解を図った。</p> <p>第2回研究会(6月24日) 不登校児童の特性と研究協議の論点について専門委員より講義を受け、その後「SSRの運用に必要なルール作りと対象児童の考え方」について協議を行った。</p>	<p>SSR運用に向けての準備、児童のアセスメント 各実践校でSSR運営の方針の確認と、SSRを利用する児童についてのアセスメントとプランニングについて協議を行った。そのうえで、運営方針や児童の実態に即した環境を随時整備するとともに、教職員間の周知を行った。</p> <p>SSR利用のルールの作成、教職員間での共通理解 SSRの意義や過ごし方についてのルールを各実践校で作成し、利用児童およびその保護者と共有した。また、教職員にも周知し、SSRへの認識を深めた。</p>
	<p>SSRは児童自身が安心な居場所と感じられることが重要。感情を言語化する支援が必要。専門職や関係機関との連携強化が必要。</p>	<p>第3回研究会(8月19日) 広島県視察における学びと先行事例の紹介をした。質問紙調査(始期)の結果から、SSRに対する教職員の理解の現状と課題について共通理解を図った。 また、教材・教具の工夫について、2学期からの取組に向けたアセスメントとプランニング、校内での会議のあり方と取組の工夫について学びを深めた。</p>	<p>質問紙調査(始期)の実施 SSRについて教職員の理解の現状を把握するため、質問紙調査(始期)を行った。</p> <p>質問紙調査の結果、第3回研究会での学びの共有 第3回研究会での学びと自校の質問紙調査の結果を教職員間で共有した。2学期に向け、SSRを利用する児童のアセスメントおよびケース会議を行った。</p>
9月 ～ 11月	<p>全ての児童にとって安心な学校、学級づくりというユニバーサルな視点に立つことが重要。</p> <p>継続的なSSRの運営が必要。全ての教職員が自分事として捉えることが重要。</p>	<p>第4回研究会(9月30日) 教職員間における情報共有と周知の現状と課題について協議し、その後不登校の未然防止を意識したアセスメントとプランニングについての協議を行った。</p> <p>第5回研究会(11月7日) SSRの運用における成果と課題を共有し、今後のSSRのあり方について協議を行った。</p>	<p>児童の変容についての把握、取組の見直し、改善 児童や学校の実態を踏まえ、研究の三つの要素についての支援が適切であるかどうか見直しを行った。指導者の見取りを通して把握した児童の変容について校内で情報共有を行い、アセスメントとプランニングの見直し、修正を行った。</p> <p>質問紙調査(終期)の実施 SSRについて教職員の理解の現状を把握するため、質問紙調査(終期)を行った。</p>

図3 本研究におけるプロジェクト研究会と実践校での取組の往還

(2) ICTによるコミュニケーションツールを活用した研究委員同士の情報共有

年度当初に研究の協力依頼に各実践校を訪問した際、研究委員や管理職より、「SSRが始動したばかりで、手探りでわからないことが多いため、情報共有や相談が気軽にできる場所があるとありがたい」という声が挙がった。そのため、5回のプロジェクト研究会に加えて、日常的に学校を越えて研究委員が情報を共有したり悩み事を解決したりできるようにすることで、各実践校のSSRの運営が一層円滑なものになると考え、個人情報に十分留意し、実践校の校長とも運用について確認したうえでコミュニケーションツールの運用を開始した。

運用後は各校のSSRの紹介や活用している教材・教具の紹介、自校の悩み事等について、情報共有がされるようになった。「周囲の理解」の観点に関わって、自校の教職員や児童に向けたプレゼンテーション資料、教職員向けに作成した通信も他校に共有された。また、SSRにおける学習参観をどのような内容や形態で実施しているか、各校の考えを交流することもあった。(図4)

このコミュニケーションツールの活用を通して、研究委員からは「悩み事を共有したり相談したりすることで、自分だけではなく、他の研究委員も同じ悩みがあるのだと分かり安心感につながった」や「他校の実践を知ることができ、自校の実践にも生かすことができありがたかった」など、学校を越えて研究委員が情報を共有することで、各校のSSRのよりよい運営に寄与することができた。

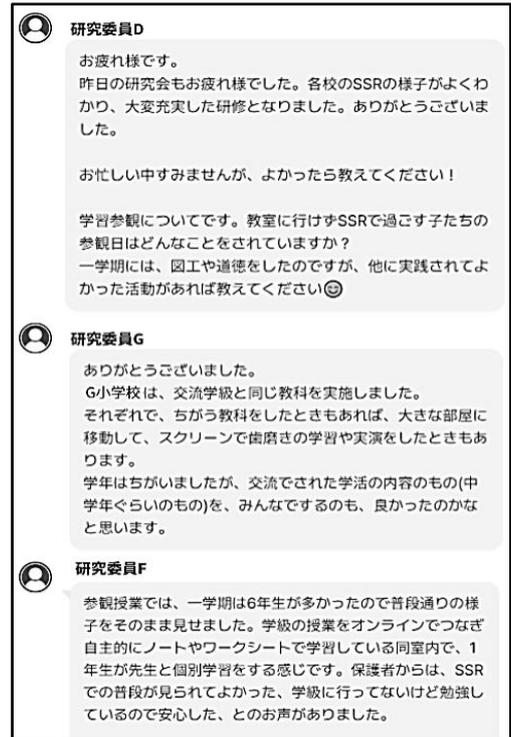


図4 コミュニケーションツール活用の様子 (原文のまま)

(3) 教職員のためのSSR通信の配付

SSRに関する理解とその啓発のため、本研究ではSSR通信(図5)を作成した。SSR通信では、プロジェクト研究会での学びやSSRの動向等をまとめ、研究委員および実践校の教職員に向けて配付した。

研究委員からは、「プロジェクト研究会での学びを振り返ることができ、自校の教職員への啓発等にも有効である」や「先進的な県の具体的な事例を知ることができ、すぐにでも日々の実践に取り入りたいと思った。」などの意見があった。また、実践校の教職員からは、「トータルアドバイザーや専門委員からの指導助言についての掲載があることで、専門的な見地からSSRについて学ぶことができよかった」との声が挙がった。

SSRに関する情報を定期的に発信、啓発することで、教職員のSSRに関する理解が深まった。

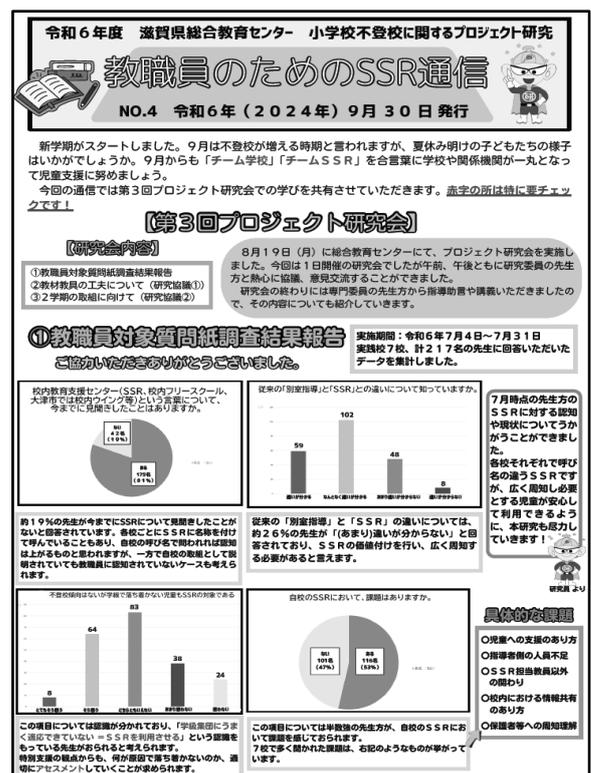


図5 教職員のためのSSR通信 (滋賀県総合教育センターで作成)

2 三つの要素に関する支援の実際

(1) 「人とのつながり」に関する取組の実際

ア アセスメントにつながる「あおぞらノート」の活用(A校の実践)

実践校のA校においては、児童が自分の状態を知ることや指導者がアセスメントをするためのツールとして活用すること、児童の状態や変容を記録として残すことを想定し、「あおぞらノート」を作成した(図6)。気持ちを表すことに課題がある児童には、表情のカードから自分の気持ちに近いものを選べるようにしたり、自分の気持ちを説明できる児童には、気持ちを点数化し、その理由について指導者に伝えたりできるようにした。これにより、指導者は児童の内面的な変化にも気付くことができた。児童にとっても、うまく言語化して説明できない不安や悩みを丁寧に聞いてもらえることで、安心して指導者と関わることに繋がった。また、来室時と退室時の児童の状態の変化を継続的に見取ることができるようになり、児童のアセスメントを行ううえで効果的であった。

図6 「あおぞらノート」

イ 気持ちを伝えるための表情カードの活用(B校の実践)

B校ではコミュニケーション能力を育むためのSSTの一環として、表情カードを活用した(図7)。表情カードは教室に掲示したほか、常にどこでも児童とやりとりできるように指導者がカードにして携帯し活用した。指導者が児童に口頭で今の気持ちや体調を尋ねると、黙り込んで返答がないことも少なくないが、表情カードを提示しながら尋ねることで、カードの表情を見て自分の体調や気持ちと近いものを言葉で答えたり、表情を指でさして伝えたりする姿が見られた。これにより、児童がコミュニケーションを図るきっかけとなり、自分の思いを他者に伝えようとする姿が見られるようになった。また、低学年の学級にも表情カードの活用が進み、学級で過ごす児童にとっても気持ちを表すツールの一つとなった。

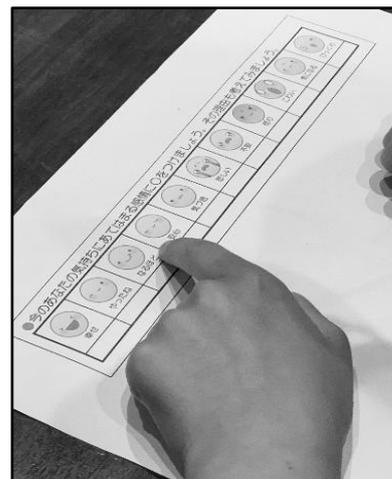


図7 表情カードの活用
(「わくわく教材ランド」のHPより引用)

ウ 安心感と自己存在感を得るための交流の工夫(C校の実践)

C校では、SSRで自分の活動を終えた児童から順番に、部屋の中央にあるテーブルに集まり、国旗かるたに取り組む様子が見られた。異学年の児童が指導者を介して交流する中で、高学年の児童が低学年の児童のスピードを考えて札を取ったり、ヒントを伝えて活動をリードしたりする姿が見られるようになった。

SSRには、個人が安心して過ごせる場というだけでなく、一定のルールのもと小集団で他者と関係を築きながら過ごす場という側面もあり、集団生活に段階的に慣れるという点で大きな役割を果たしていると考えられる。他者と関わる機会を設定していくことで、児童の自己存在感を高めることにつながり、安心して指導者や友達に自分の思いを伝えるきっかけとなった。

(2) 「安心できる環境づくり」に関する取組の実際

ア 学びの空間と方法の工夫(D校の実践)

D校では個別学習と協働学習のどちらの形態にも対応できるように長机を使用し、その日のSSRの利用児童の状況に応じて個別学習をするか協働学習をするかを、指導者は児童と話し合いながら決定した(図8)。また、教室の一面には、床上げされた三畳の畳スペースを設け、カーテンも取り付け、体調が優れない時や一人で気持ちを落ち着かせたい時などに休憩できるようにした。そうすることで、休憩後自分のタイミングで再度学習に参加することができた。他にもSSRを利用する児童同士で相談し、部屋の飾りをつくって掲示したり、メダカを飼って世話をしたりするなど、役割への意識をもち、他者と協力しながらSSRで過ごす様子も見られた。



図8 学びの空間の工夫

登校に不安を感じている児童との日常的なやりとりには、授業支援アプリであるロイロノート・スクールを活用し、指導者より、その日の学校での出来事等をカードにまとめて送り、児童とコミュニケーションを図った(図9)。児童は日常の学校の様子や出来事を知ることで、登校した際も落ち着いて学校生活を送ることができた。

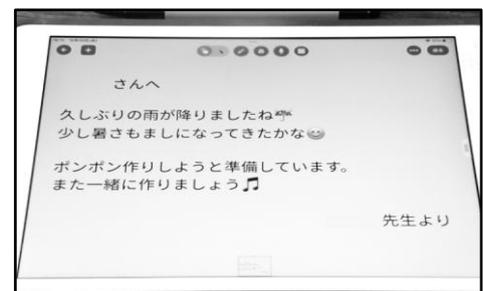


図9 ロイロノートでのやりとり

イ 週予定を活用した自己決定の工夫(E校の実践)

社会的な自立を支える要素として、児童自身が自己決定をする力を育むことは非常に重要である。E校ではSSRを利用する際に、児童自身がいつ、どこで、どのような活動をするかを学級の週予定を見ながら指導者と相談して決めるようにし、児童の自己決定を大切にしたい。

学級の週予定(図10)を活用することは、児童が学級の動きを把握し、その日の目標や1週間の見通しをもつことにつながる。指導者は、学級と関わることができたかどうかではなく、児童が自己決定して活動できたことを認め、活動できた時間に花丸を書き入れるなど児童のがんばりを視覚化した。そのことが児童のモチベーションを向上させ、次の自己決定にもつながった。

		年 組 時間割 予定表					時間割 予定表		
		9月9日 (月)	9月10日 (火)	9月11日 (水)	9月12日 (木)	9月13日 (金)	10月21日 (水)	10月24日 (土)	10月25日 (日)
行事							お遊園地しゅうかん		
1	算数 家計簿の まとめ (P40-67)	国語 ローマ字	国語 ローマ字	算数 かけ算の きまりを 考えよう	算数 かけ算の きまりを 考えよう	国語 読書	国語 おすそめ の12つを 決めよう	国語 おすそめ の12つを 決めよう	国語 おすそめ の12つを 決めよう
2	国語 ローマ字	算数 かけ算の きまりを 考えよう	算数 かけ算の きまりを 考えよう	算数 かけ算の きまりを 考えよう	国語 読書	国語 おすそめ の12つを 決めよう	国語 おすそめ の12つを 決めよう	国語 おすそめ の12つを 決めよう	
3	算数 かけ算の きまりを 考えよう	国語 読書	国語 読書	国語 読書	国語 読書	国語 おすそめ の12つを 決めよう	国語 おすそめ の12つを 決めよう	国語 おすそめ の12つを 決めよう	
4	国語 読書	算数 かけ算の きまりを 考えよう	算数 かけ算の きまりを 考えよう	算数 かけ算の きまりを 考えよう	国語 読書	国語 おすそめ の12つを 決めよう	国語 おすそめ の12つを 決めよう	国語 おすそめ の12つを 決めよう	
5	国語 読書	算数 かけ算の きまりを 考えよう	算数 かけ算の きまりを 考えよう	算数 かけ算の きまりを 考えよう	国語 読書	国語 おすそめ の12つを 決めよう	国語 おすそめ の12つを 決めよう	国語 おすそめ の12つを 決めよう	
6	国語 読書	算数 かけ算の きまりを 考えよう	算数 かけ算の きまりを 考えよう	算数 かけ算の きまりを 考えよう	国語 読書	国語 おすそめ の12つを 決めよう	国語 おすそめ の12つを 決めよう	国語 おすそめ の12つを 決めよう	

図10 週予定を活用した自己決定の工夫

(3) 「周囲の理解」に関する取組の実際

ア 教職員への啓発(F校の実践)

F校では、学校の実情に合わせた研修資料を研究委員が作成し、教職員研修を実施した。SSRの定義および別室との違い、不登校支援の進め方、社会的自立に向けたSSRでの取組についての内容を中心に説明を行った(図11)(図12)。

その後の協議では、児童の見立てや支援について具体的な事例を基に話し合った。従来までの別室による学力保障を中心とした不登校支援ではなく、児童の思いを尊重し寄



図11 教職員研修の様子

り添う支援が求められていることについての考えを深める様子が見られた。

研修を受講した教職員からは、「社会的自立は全ての児童にとっての目標であり、そこに辿り着く道は、人の数だけある」や「SSRは今の学校づくり、教育には不可欠な場所だと再認識した」などの意見が見られた。早期発見、早期対応、チームで対応することの重要性について改めて認識する機会となった。

イ 児童が理解を深める機会の設定(F校の実践)

F校では、全校児童がSSRを理解するための説明資料として、スライドに音声をつけ動画化したものを各学級で視聴した(図13)。児童からは、「SSRがどこにあるか知っている」や「落ち着いて学べる場所だね」との声があり、SSRに対する理解が深まっている様子が見られた。

また、学級の児童とSSRを利用する児童とが交流をもてるように、SSRの教室の一部を可動式のパーティションで仕切り、共有スペースとして休み時間に開放した。開放後、児童同士が段ボールで工作をする様子や遊ぶ様子が見られ、全校児童のSSRに関する理解を深めたことで、SSRを利用する児童の人とつながる機会を広げることにつながった。

ウ 保護者との連携(各実践校の様子)

SSRによる支援は、SSRを利用する児童だけでなくその保護者の理解を得ることが不可欠である。各実践校において、懇談で保護者に対してSSR設置の意図やSSRでの支援のあり方について説明し、中長期的な視点で児童の成長を捉えることなどを確認した。送迎時などに保護者から、SSRの存在を知り理解が深まることによって保護者自身の不安が軽減されたという声や、児童が期待感をもって学校とつながろうとする姿が見られるようになったという話があった。また、実践校の研究委員や管理職からは、SSRを利用している児童の変化を実感できたことで保護者自身の表情も明るくなり、児童の心理的な安定にもつながっているという話もあった。

エ SSRの運営に関する教職員の日々の動静表の作成と定例会の実施(G校の実践)

G校では、教職員同士の連携およびSSRを利用する児童の情報共有を図るために、教職員の動静表を作成した(図14)。そこに、毎朝各教職員の動きを記入し、多くの教職員がSSRを利用する児童と関わることができる体制づくりに努めた。また、月に一回程度開催される全教職員で行う生徒指導の会議では、SSWも参加し、多面的・多角的な視点からSSRを利用する児童についての情報共有、支援について話し合った。それにより、児童理解が進み、教職員が共通理解のもとに支援を行った。多様な視点で児童や保護者のアセスメントとプランニングを行うことで、「チーム学校」として対応することができた。

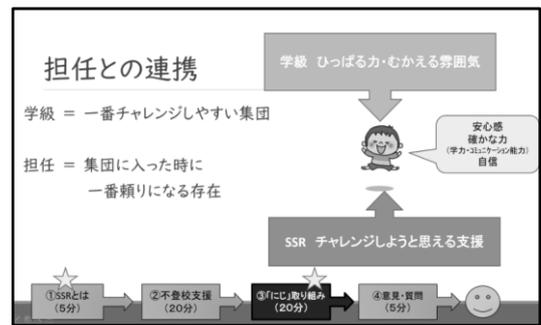


図12 教職員研修で提示した資料

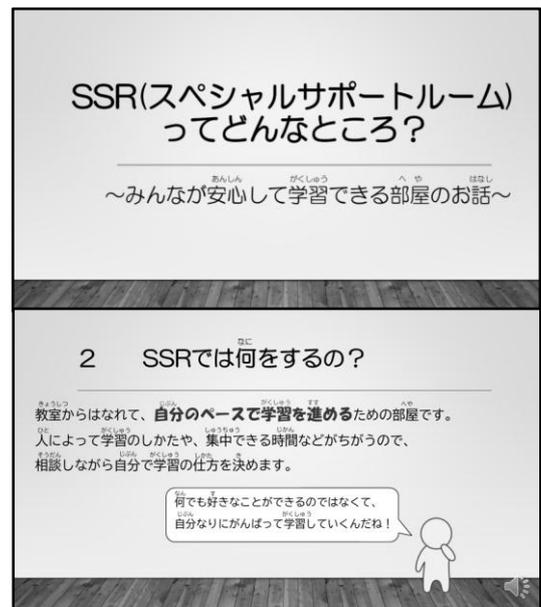


図13 児童に向けての説明資料

教職員	1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日	13日	14日	15日	16日	17日	18日
教職員A	年長児																	
教職員B																		
教職員C																		
教職員D																		
教職員E																		
教職員F																		

図14 日々の教職員の動静表

3 教職員の変容および児童の見取り

(1) 教職員質問紙調査から分かる教職員の意識の変容

研究の始期と終期に、実践校7校の教職員を対象として教職員質問紙調査を実施した。「従来の『別室指導』と『SSR』との違いについて分かりますか」という質問に対し、「違いが分かる」「何となく違いが分かる」と肯定的に回答した教職員の割合の合計は74%から82%に増加した(図15)。

また、「次年度以降にSSR担当者となる、もしくは不登校および不登校傾向にある児童と関わると仮定して対応できますか」という質問では、「自信をもって対応できる」、「どのように対応するかイメージできる」の二つの項目において、「とてもそう思う」「そう思う」と肯定的に回答した教職員の割合に3%の増加が見られた。一方で、まだ不登校児童への対応について自信がもてなかったり、対応のイメージがわからなかったりする教職員が一定数いることも分かった(図16)(図17)。

さらに、終期質問紙調査で「自校のSSRに関する取組を通して、効果を感じる場面はありましたか」の質問に対し、「あった」「どちらかというとなかった」と肯定的に回答した教職員は168名で、割合の合計は88%であった(図18)。効果を感じた教職員の自由記述では、72名が「不登校傾向の児童が登校できるようになった」という登校に関する内容を記述した。そのほかにも、65名が「児童の表情が明るくなった」「安定して過ごしている様子が見られた」という児童の様子に関する内容を記述した。児童の変容に関わっては、「教職員の意識、関わり方の変化」「保護者の安心感」「学級担任の安心感、負担軽減」にもつながっているという声もあった(図19)。このように、SSRに対する周囲の理解が深まること、SSRの取組が充実することで、SSRを必要とする児童が安心して成長でき、その姿が教職員や保護者の安心感につながるというサイクルを生み出すことが分かった。一方で、効果を感じる場面が「どちらかというとなかった」「なかった」と回答した教職員も12%あった。その理由として「どのような取組をしているのか分からない」「もう少し取組の内容や児童の様子を学校内で共有する必要がある」という回答があった。SSRの周知、理解は進んだものの、運営面で教職員間の連携、情報共有を図ることには課題があり、保健室や特別支援学級と同様に校内体制としてSSRを位置付け、継続的に取組を進めることが重要だと考える。

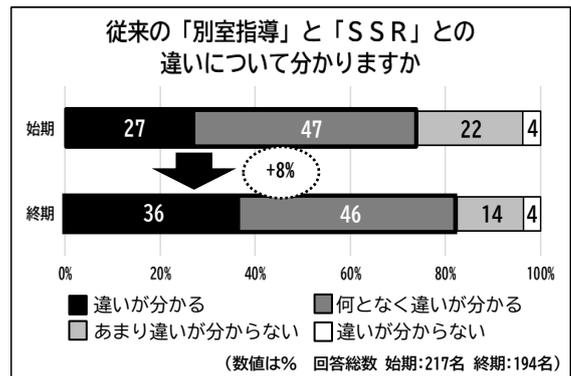


図15 「別室指導」と「SSR」の違いについて

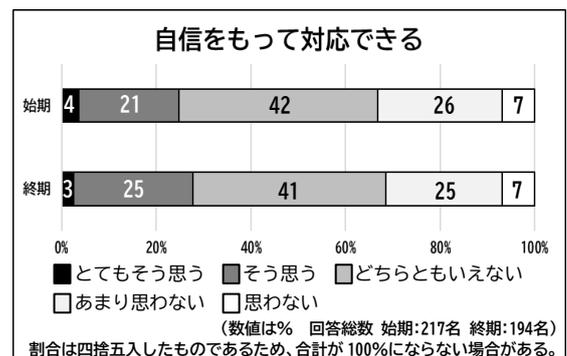


図16 不登校児童への対応について

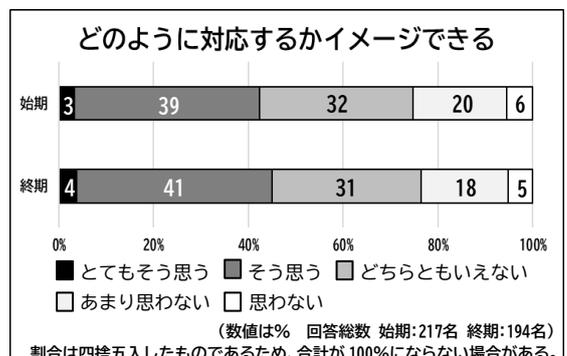


図17 不登校児童への対応のイメージについて

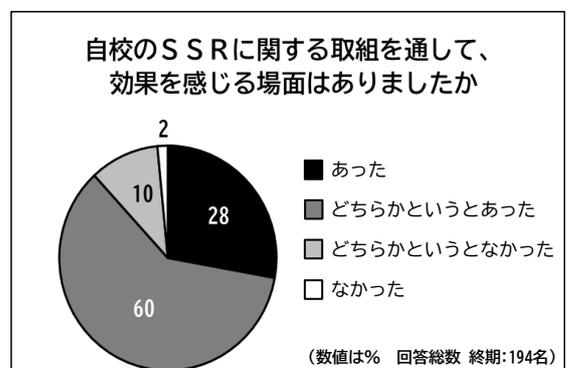


図18 SSRの効果について

- ・子ども、担任、保護者それぞれにとって、SSRという選択肢が増え、気持ちが楽になった。そこで気持ちを整えて教室に來られた。
- ・教室へ行くことが不安だった児童が、SSRであれば登校できるようになり笑顔が増えた。
- ・行きづらさを感じる児童も、自分自身の意思をしっかりとって日々を過ごしているように感じた。
- ・本人の気持ちを尊重しながら、保護者と担任等と連携し、安心して過ごせるような居場所をつくることにつながっていると考える。学校が居場所のひとつとなっている、あるいは居場所のひとつとなりつつあることは効果があったと考える。
- ・担任だけではできない個別の対応ができる。また、児童が安心して登校できる環境をつくることができる。親と子どもどちらも心身ともに安心できることで新たな環境にもチャレンジでき、様々な問題の改善に効果があると感じる。
- ・相談したいと考えていた保護者が相談機関とつながることができた。
- ・児童が「SSRが今年からできて、静かな環境で安心して学べるのがよい」と言っていた。児童の精神的安定につながった。

図19 「自校のSSRに関する取組を通して、効果を感じる場面はありましたか」という設問に対する自由記述の回答(一部抜粋)

(2) 教職員による児童の見取り

研究を進める中で、各実践校において研究委員を中心にSSRを利用する児童の見取りを進めた。どの実践校においても、SSRの利用によって「児童の欠席が少なくなった」や「保護者の表情が明るくなった」といった肯定的な反応を得ることができた。

A校では、自分の困り感や悩みについて伝えることをためらっていた児童に対し、指導者が丁寧に思いを受け止め、感情を表現するSSTに取り組んだ。取組を始めた当初の児童は、不安感が大きかったこともあり、自分の気持ちを全て「ドキドキ」という言葉で表していたが、「ドキドキにもどうしたらよいか分からない『ドキドキ』もあれば、楽しいことに対する『ドキドキワクワク』もあるね」と指導者からの助言を受け、表情カードを活用しながら気持ちを整理するようになった。また、「うれしい」や「いやだ」といった気持ちを表す言葉について、他者はどのような感情からその言葉を使っているのか、さらには自分が言われるとどのように感じるかを言語化し書き出すことで、自分の受け取り方と相手の思いとの間にずれが生じることを客観的に捉える姿が見られた。この取組により、他人との思いの相違を許容できるようになり、自分の困り感を保護者に打ち明けることができた。そして、児童は思いを伝えてもよいという安心感から、徐々に学校で過ごす時間が増えた。

B校では、昨年度まで不登校にあった児童がスポーツに興味があることを指導者が知り、SSR内に関連するスポーツの用具を準備したところ、4月から1日45分間ずつ登校できるようになった。当初はSSRでスポーツのみを行っていたが、次第に活動内容の幅が広がり、児童が自分で計画した学習内容に沿って活動できるようになり、学習意欲の向上が見られた。また、コミュニケーション面においても変容が見られ、児童から指導者へ話しかける場面が増えた。

C校では児童と指導者との会話の中で、「SSRが開いてへんかったら学校行かへん」といった声も聞かれるなど、SSRが家庭と教室の間にある安心できるサードプレイスとして機能している様子が見られた。特筆すべきは、児童の言葉にもあるように、「SSRがなければ」とSSRの存在そのものが児童の安心感につながっているということである。「A先生でないとSSRに行けない」といった特定の指導者との関わりに頼ったSSR運営では、児童の安心感が人によって左右され、学校体制として継続的な運営にはつながらず、担当をする教職員への負担が大きくなることも推察される。C校では担当以外に支援員やSSWなど様々な大人が関わることで、児童の安心感を高める一助となった。さらに、児童が教室で過ごすのか、SSRで過ごすのか、自己決定を行う機会を設定した。児童は、他の指導者と関わることで安心できる存在を増やすとともに、友達との交流も増え、人とのつながりを広げていく姿が見られた。

D校では、2年以上登校できていなかった児童とその保護者に、本年度から設置したSSRについて説明を行ったところ、SSRの趣旨を理解し登校につながった事例があった。また、別の事例として、集団で行動することを苦手とし、学校行事への参加に不安を抱えていた児童が、安心できるSSRがあることで運動会に参加でき、そのことが自信となってマラソン大会にも参加し完走する姿が見られ



図20 マラソン大会後児童が書いた作文

た事例もあった(図20)。

これらの児童の変容の姿から、三つの要素に関する支援を充実させることによって、SSRを利用する児童にとってSSRが安心して学べる居場所となり、成長につながっていると考えられる。

Ⅶ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- (1) 「人とのつながり」の支援においては、指導者がアセスメントとプランニングを行い、児童への理解を深め関わること、また、コミュニケーション能力を育むためのSSTや人と交流する機会を設定することで、児童が安心して指導者に自分の思いを伝えることができるようになったり、自己存在感の高まりや他者と関わる意欲が生まれたりすることにつながった。
- (2) 「安心できる環境づくり」の支援においては、児童の実態に応じて環境を整えたり、児童自身が自己決定できるように支援したりすることで、児童が安心して学校生活を送ることにつながった。
- (3) 「周囲の理解」の支援においては、校内での研修や情報共有を随時行うこと、多くの教職員の視点から児童のアセスメントとプランニングを進めることで、SSRについての理解が深まり、「チーム学校」として組織的に不登校支援や未然防止に向けた対応につなげることができた。
- (4) 児童の社会的自立を見据えた三つの要素を軸にした支援を充実させることで、児童が自分の思いを表現し、SSRが利用する児童にとって安心して成長できる居場所の一つとなった。

2 今後の課題

- (1) 児童が更に安心して成長できるSSRにするために、日頃から児童の状況について情報共有、連携を図りながら全ての教職員が主体的にSSRに関わり、校内体制としてのSSRを確立し、継続して運営できるようにしていく必要がある。

- (2) 関係機関等との連携や学校を越えた教職員同士のつながりを大切にしながら、情報共有や相談することができる仕組みの構築が求められる。

文 献

- 1) 文部科学省「不登校児童生徒への支援の在り方について(通知)」、令和元年(2019年)
2) 文部科学省「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策(COCOLOプラン)」、令和5年(2023年)
3) 文部科学省「生徒指導提要」、令和4年(2022年)
文部科学省初等中等教育局児童生徒課「令和3年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」、令和4年(2022年)
文部科学省初等中等教育局児童生徒課「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」、令和5年(2023年)
文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課「高校生のライフプランニング」、平成30年(2018年)
滋賀県教育委員会「しがの学びと居場所の保障プラン」、令和6年(2024年)
滋賀県教育委員会「滋賀の子ども達の社会的自立を支える 学校教員向け不登校の理解と対応リーフレット」、令和6年(2024年)
文部科学省「教育振興基本計画」、令和5年(2023年)
滋賀県教育委員会「滋賀の教育大綱(第4期滋賀県教育振興基本計画)」、令和5年(2023年)
「わくわく教材ランド」<e-kyozai.com>

トータルアドバイザー

国立大学法人滋賀大学大学院教育学研究科教授 芦谷 道子

専 門 委 員

滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課主査 田中 哲郎

滋賀県教育委員会滋賀県SSW SV
(スクールソーシャルワークスーパーバイザー) 上村 文子

研 究 委 員

湖南市立石部南小学校教諭 浦谷大三郎

長浜市立神照小学校教諭 嘉瀬井弘美

守山市立河西小学校教諭 寺井真理子

野洲市立北野小学校教諭 吉川 祐持

草津市立渋川小学校教諭 宮永 真紀

大津市立瀬田北小学校教諭 南野 亜弥

彦根市立高宮小学校教諭 宮田 多恵